

『親鸞「四つの謎」を解く』

2014年11月13日

梅原猛氏が著した『親鸞「四つの謎」を解く』は推理、サスペンス、ロマン、ユーモアがあり、楽しく読んだ。梅原氏は中学生の時に読んだ『歎異抄』に魅せられて以来、親鸞とは長く、深い付き合いをしてきたと言う。親鸞の著作はもとより、親鸞に関する歴史上の膨大な著作を読み、歴史的背景と関わった人々から、親鸞像を描き出している。「はじめに」に親鸞が亡くなったと同じ90歳になり、親鸞の喜びや悲しみを理解できるかも知れないと書いている。時来たりと、満を持して、精魂込めて著した力作である。

梅原氏は、学び続けた親鸞に関して納得のいかない四つの謎が心に突き刺さっていた。その四つとは 1. 出家の謎 2. 親鸞が法然門下に入門した謎 3. 親鸞の結婚の謎 4. 親鸞の悪の自覚の謎である。

1. 出家の謎に関して。親鸞の母親は源の総帥、義朝の娘であった。従って、源頼朝の甥に当たる。平家は源氏討伐に躍起であった。源氏の血統を引く親鸞の生命の保全のために、9歳で出家させたという。親鸞の時代は戦乱に明け暮れていたのである。

2. 親鸞が法然門下に入門した謎に関して。親鸞の師・慈円は学識の高い高僧であったが、権力に絡む政治力を発揮する怪僧であった。親鸞は政治僧の生き方に嫌悪を感じ、乞食坊主のような法然の門をたたいた。法然から「他力浄土の教えこそ仏教の行の内でもっとも優れ、もっとも迅速にして、もっとも容易な極楽往生の道です」と、自力聖道の教義から他力浄土を諭され、感激の涙をもって受けとめたという。慈円の下で、ずば抜けて優秀な学徒であったが、自力に行き詰まり、他力に開眼したのであろう。

3. 親鸞の結婚の謎に関して。女性を差別する仏教を激しく否定した師・法然から、親鸞は九条兼実の娘「玉日」との結婚を勧められ、結婚した。東国に流刑されていた間に「玉日」は亡くなり、その後、「恵信尼」と結婚した。僧も結婚することによって、男も女も満足し、共に極楽浄土に往生できると男女平等を切り拓いた仏教界の革命であった。

4. 親鸞の悪の自覚の謎に関して。『歎異抄』を通して、親鸞の「善人なおもつて往生をとぐ。いはんや悪人をや」の「悪人正機論」は、よく知られている。「悪人正機論」は法然も語っている。この論は、自分の悪人性の認識から生まれる。親鸞は「つくづく思い知ることには、悲しいことに禿頭の親鸞は、愛欲の果てしのない広い海に沈み、名誉と利益の高山に迷い、浄土に生まれる人の数に入れられることを喜ぼうとせず、悟りの境地に近づくことも嬉しいとは思わないのです。まったく恥ずかしいことです」と言っている。梅原氏は「このように自己の悪を痛切に懺悔する祖師はいただろうか」と書いている。

親鸞とパウロの類似性が言われる。パウロは「信仰によって、義（よし）とされると語った。そのパウロは「わたしはなんと惨めな人間なのでしょう」と呻き、「わたしは、その罪人の中で最たる者です」と自分の罪に苦悩した人であった。親鸞は、末法の世と言われた地獄のような動乱の中で「南無阿弥陀仏」と念仏すれば往生すると説いた。この念仏の教えは、あの世での往生を保障するばかりではなく、現世に安穩をもたらすものであった。二人とも、人間の「行」を排除している。人間存在の底に触れる時、「行」など言えない、どうしようもない悪と罪に行き着く。それらを乗り越える、向こう側から来る恵み、往生こそが救いとなる。

宗教の根幹をなす使命は、今の生を肯定、是認する道筋を説くことであろう。私は、これを求め続け、求道の全てであったと言ってもいい。